

## 雑事記(47)

盛丘 由樹年

今回は次の複数のエッセイにより構成される。

探訪についてはそれなりに、次に、文明的なことと、人の心の機微、人の特性を考えてみた。

### ・戦争遺跡探訪(18)

- ・便利で豊かな暮らしをするために
- ・他人が負けようが勝とうがオレの知ったことか
- ・人は誇りをもって生きる
- ・思い込み・成りきり・役わり

### 戦争遺跡探訪(18)

①から④まで、日付順に記述し、撮影した写真を添える。

① 久里浜はなの国・地下壕(2023/4/27) 神奈川県横須賀市

ゴールデンウィークの直前の金曜日に、私は京急久里浜駅に来た。久里浜は横須賀市に属し、その昔、周

辺に軍の施設が多くあったところだ。JR久里浜駅も、軍用目的に敷設されたものだろう。

久里浜一带には、海軍工作学校、機雷学校、対戦学校、通信学校など、海軍関係の教育施設があったことを、付け加えたい。今も陸上自衛隊の駐屯地が近くにある、久里浜の南西側には、海軍病院だった久里浜医療センター(主にアルコール症など精神科の診療)が名を変えて存在する。

今回の主目的地、久里浜はなの国は、駅から歩いて10分ほどの丘陵部にある。

その公園に向かって歩いて行つた。私はこれまで久里浜を素通りしていたから、今回、少し観光を兼ねて歩いてみた。途中、道筋に久里浜天神社(天満宮)があったので寄つてみた。鳥居をくぐると、寝そべった牛にまたがるように座る菅原道真の銅像がある。境内は、それなりの参拝者の姿もあり、にぎわっていた。

しばらくして久里浜はなの国の東の入り口から、私は丘の上上がった。広くて緑豊かな平地に新しく施設がある。いくつかの遊具が置かれている。子どもたちの姿も多くみられ、この公園に対して好感をもつた。

ただし、立ち入りが制限されているところがある。通路に沿って、あるいは、それぞれの公園エリアが柵で

仕切られており、自由に歩き回れないことが気になった。ここも、その昔、軍用地だった名残だろう。のんびりしたいところだが、私には別な目的があって、そちらに向かった。



久里浜はなの国  
公園の一部。右下に見えているように、柵があるのが特徴的

久里浜はなの国の一角に、エアライフル射撃場がある。弓道場も隣接している。ここは会員制の施設だろ

うから、私は管理棟にいた係員に一言挨拶してから、奥へ進んだ。一般の人が、むやみに近づけない雰囲気がある。エアライフル射撃場は、斜面を掘削した地下施設に、トンネルのような入り口のなかにある。



久里浜はなの国  
エアライフル射撃場の入り口  
その昔「地下倉庫」だった

ネット上の Yakumo さんが、FC2 への掲載している記事「とある戦績と自衛隊」のよると、エアライフル

射撃場は、戦争中の地下倉庫を改造したもので、魚雷の信管の調整室だったとの情報があるという。

地下室のようなものだから、外にはほとんど音が漏れないので、利用したものだろう。

当時正式には、横須賀海軍軍需部久里浜倉庫と言っていた。地下倉庫Ⅱ倉庫壕については、この他にも、この周辺の道路沿いに、いくつもの入り口（コンクリートでふさがれている）がフェンスを通して見られる。もちろん、私は帰りにそこを歩いた、

ベトナム戦争では、その倉庫内にあった物資（朝鮮戦争で余剰になったもの）が活用されたという情報もある。なお、米軍兵站物資の倉庫と言えば、メインは今でも同県の相模原にある。そこに武器弾薬類は置いていないというけれど。

私は、久里浜の海岸に出て、歩いてゆくと、途中に幾分さびれた住吉神社があった。住吉神社とは海上交通に係る神を祭ったものだろう。三浦半島に似つかわしい。

形だけ参詣してから少し歩くと、久里浜—かなや金谷間のフェリーの船着き場に出た。駐車場には多くの乗用車が整然と停められていた。フェリーに積み込む予定のものだろう。フェリーも接岸していたが、その出航時

間まで、まだ間があるようで、動きがなかった。

私も若いころ、ここでフェリー待ちをしたことがある。「久里浜フェリーで東京湾を横断し、房総半島に車で行く」ことは、私の若いころのささやかな冒険の一つだった。そのころのことを思い起こさせてくれた。

—あれも今頃の季節、ゴールデンウィークの連休を利用して車で、きまぐれな一人旅に出た。基本的に車中泊だった。房総半島のとある海岸の駐車場で車の中で寝ていたら、パトロールの警官二人に顔にライトを当てられて、起こされ、しつこく職務質問されたことまで思い出した。完全に不審者と思われた。「公的な駐車場に車を止めて、何が悪いんだ。彼らは人を見ればドロボーと思ってるんだろう」と腹立たしく思ったことまで、記憶によみがえった。（最近の報道によると、彼らは、アジア系外国人を見ればドロボーと思つて、しつこく職務質問するらしい。

「テメー、免許証を見せろ。どこから来た？ これからどこへ、何しに行くんだ？ うしろのトランクを開けてみせろ！ なんだこれは？」

一人の警官がシュノーケリングの用具を指さして怒鳴つた。そのころ私には海の中を潜って魚介類や海藻を見る趣味があり、房総の海に潜れる機会があれば（実

際は、海水温がまだ低いから、無理に使おうと思って、持ってきた。

「このへんは禁漁なんだ。海に潜って、魚を見ているだけのヤツがいるか！ キサマ、密猟者だろ？」（実際の言葉遣いはもっと丁寧だったが、意味は同じ。変な記憶まで思い出してしまった）

さらに歩いてゆくと、久里浜の砂浜海岸に出た。その一隅でテントを張っていた若者たち以外、人影はまばらだった。私は波打ち際まで歩いた。

1853年（嘉永6）、アメリカの東インド艦隊司令長官だったペリーが軍艦4隻を率いて来航した。浦賀からこちらに回り、上陸した場所だ。一漁村であったこの浜で、幕府側の侍たちも大勢参列し、盛大なセレモニーが行われたという。

今回の観光目的の一つ、ペリー公園が、道路を隔てて陸地側にある。それなりの広さの公園の中に洋館風に新しく作られたペリー記念館があり、自由に見学できる。建屋の写真を見て興味を持った私だが、それ自体の歴史的価値はないようだ。その中で、入場料を取っていないが、かなり充実した内容の事物を展示していた。当時の軍艦模型や、その盛大なセレモニーの画像もある。

なお、記念館の2階のバルコニーらしいところは建築的な装飾らしい。そこに立って外を眺めることはできない。



久里浜のペリー公園  
手前に錨、左に巨大な石碑、奥に記念館

さらに、できれば、隣の地区の浦賀にも寄りたいたいと思っていたが、それは、長く歩き回って疲れていた私としては、欲張りすぎというものだから、ここで帰路

についた。

② 世田谷教会のかまぼこ兵舎 (2023/6/14) 東京都世田谷区

カトリック世田谷教会の区域に、戦後のアメリカ軍が残した「かまぼこ兵舎」の建屋が残っているという新聞記事(毎日新聞朝刊 2023/6/4 日曜くらぶ・レトロの美。教会内部とともに、かまぼこ兵舎がカラー写真で示されている)を読んで、さっそく私は、訪れてみることにした。かまぼこ兵舎も戦争に係る遺跡としたい。

下北沢駅から北東方面に歩5分のところだから、同じ私鉄線路沿いに住む私にとって比較的交通の便がよい。でも、この日は朝から梅雨の曇り空で、ときおり小雨が降る天気だったから、私の気分は低調だった。

小田急・下北沢駅を降り立った。ただし近年、小田急線はこの周辺区間で地下に潜り、地下鉄のような様相になったから、降り立ったというより「上り出た」と表現すべきかもしれない。

狭いながらも、それぞれ自己主張の強い飲食店が軒を連ねた通りを歩いて行つた。時間的に、準備中の店

ばかりだったが、こてこて感があって興味深い。それが下北沢らしいのだろう。



下北沢のザ・スズナリ  
古典的(?)なマーケットの外観

目的の教会があると思われる近辺に、昔の映画館的な建屋が目の前にあったので、これも私の目を引いた。「ザ・スズナリ」とモダンな看板が掲げられているが、上方に見える、さびれたネオンサイン(?)には「鈴

なり横丁」の文字が見える。これはマーケットだったものだろう。大きな建屋が、左右に区画された小売店を包み込んでいる形式の木造建築物だ。中央に入り口があつて、通路が奥に続いているのだろう。戦後の、物不足でありながら賑わっていた食品などの売り場の集合体として、私の心にイメージが記憶されている。

帰りに、中央の入り口から恐る恐る中をのぞいてみたことを先にレポートすると、「なんだ、これは？」とうなつてしまった。乱雑ぶりがすごい。一部が飲み屋になっており、そのドアなどには雑多な木片の「アート作品」が飾り付けられていた。見上げると、天井には怪しい構造物が覆いかぶさるようにはみ出ししていたりしている。外観のイメージから大きく変貌している。

さて、目的地近辺に来たが、教会の尖塔などが見えないので、よくわからないまま、私道のような上り坂に入ってみた。開けた緑地があり、すぐ右手に目的の「かまぼこ兵舎」を見つけたから、正解だった。探し回る手間が省けた。どうやら、この道は教会の裏手の通用口に当たらしい。

かまぼこ兵舎は半円形の屋根が特徴で、これは、緑がかつた水色に塗装されている。プレハブのようなも

のでなく、一部にモルタルが使われたりして、しっかりと作られているが、それは後付けされたものかもしれない。



世田谷協会のかまぼこ兵舎

これは戦後、一時的に首都圏に駐留したアメリカ軍が建てたもので、撤収後、世田谷教会に譲られたものという。ここに兵舎を建てた理由はよくわからない。

ともあれ築70年ほどと思われる。いまでは市民の集会やイベント会場に使われているというが、私が見たところ、使用頻度は低いようで「放置されたまま」という印象を受ける。

私自身、学生のころ（1960年代後半）、自衛隊の某基地で2週間ほど寝泊りをして航空機開発の実習（風洞実験）をしたことがあり、基地内にかまぼこ型の建屋がいくつかあったことを記憶している。その一つはPX（購買部）として使われていて、私もときどき出入りした。

教会の建つ敷地内に踏み込むことは、遠慮したが、この「かまぼこ兵舎」のあるエリアから、ルルドの洞窟が見えていたので、遠方から撮影した。

ちなみに、この雑事記で「ルルドの洞窟」を紹介するのは3度目になる。カトリック教会の付属施設（模範的に造られたもの。原型はフランスにある）ながら、興味半分では近づけない場所であると察する。



世田谷教会のルルドの洞窟  
右上に白いマリア像がある

③ 椎の実子供の家・高射砲台座跡（2023/6/14）東京  
都三鷹市

「椎の実子供の家」の敷地内に高射砲台座跡が残っていることは、戦争遺跡マニアにはよく知られている。砲台跡はほかにもあるので保留しにしていたが、つ



いでに私は、下北沢から電車を乗り継いで行けることから、訪れてみることにした。

西調布駅から県道123号に沿って北へ歩いた。途中、上石原で旧甲州街道沿いに「近藤勇の生誕地」の幟旗がいくつかはためいていた。気まぐれにそちらに歩いた。この辺には、蔵のある旧家などが残っており、少々興味深い。生誕地については、どこにあるかわからず、まもなくあきらめて、元の道に戻った。

偶然ながら私は、新選組にちなむ場所（日野市や東京都北区で）によく遭遇している。彼らは郷土の英雄的な人物として持ち上げられている。私には英雄とは思えない。近藤勇など、時代を読めなかった人物の一人だろう、

中央自動車道の高架をくぐり、さらに北に進む。この県道123号の北西側には、調布飛行場の敷地が広がっているはずだが、樹木に隠れてよく見えない。飛行場としては小さく、今では軽飛行機専用の、主に訓練用として使われているが、その昔は、陸軍の飛行場だった。飛行場北部にコンクリート製掩体壕がいくつか残されていることは、以前にもレポートした。戦争の記憶として教基が公園内に、壊さずに保存する方策がとられている。

当時最新鋭の戦闘機を隠していたものだが、それらは、B29爆撃機の大編隊を迎撃するには性能的にも、数的にも足りなかった。余裕のない設計（精度を求めすぎ）のために製造・加工が難しく、特にエンジンの故障が多発した。燃料にも事欠ことかいていた。そんな役立たずの戦闘機を掩体壕の中に隠しておく意味はなかった。

自然景観の良い野川を大沢橋で渡ると、右手に樹木が生茂る丘が見えてくる。羽沢小学校を過ぎてから、右に入り、ゆるい坂を登ってゆく。その上が目指す丘であり、どんぐり山とも呼ばれていたらしい。山と呼ぶには低すぎるが、高射砲を据えるにはちょうど良かったのだろう。首都防空のための陣地の一つだった。そこは今では、椎の実子供の家（こども園）になっているわけだ。

坂を上がった道路際の角に案内板がある。これによると、ここは「首都防衛高射砲陣地跡」であり、椎の実子供の家の敷地内には、4カ所の高射砲台座跡と、一か所の陣地跡があると示されている。

この日は、平日であり、建屋内から子供の声が聞こえてくる状態であり、中に入るのは遠慮した。でも、駐車場に侵入するのは可能だった。その一角に、はっ



きりとした台座跡があった。周囲の柵の外からも一か所が見えた。全部を見る必要はないと思い、撤収した。



門扉の前にある高射砲台座跡  
本来は円盤の形状だったが、通行のために  
コンクリートの一部が切り欠かれている

区 ④ 横浜大空襲の被弾鉄柱 (2023/6/20) 横浜市磯子

5月29日になると、横浜大空襲が話題になる。地域のマスメディアなどが、歴史的な出来事として取り上げるからだ。県民の一人として私の耳にも入る。

1945年のその日に横浜市は空襲で壊滅的な被害にあった。B29爆撃機による焼夷弾攻撃で、地上は火の海になった。そして翌日、市街は見渡す限り焼け野原になったとされる。

その横浜大空襲の痕跡は、今では意外に少ない。その一例として、7、8年前に、保土ヶ谷区の古い街並みを見学するツアーで聞いた話では、ある住宅に、焼夷弾が屋根を突き破って落ちてきた跡があるという。それは不発で火災にはならなかったが、屋根は修繕したけれど、室内にその跡を（記念に？）残しているという。

今般、横浜市電保存館に残っているものがあるという情報を得て、私はさつそくその地に、磯子区滝頭たきがしらに行ってみた。6月20日、ちょうどその日の午後横浜みなとみらい地区に行く用事があったから、午前中に見て回ろうと思った。横浜駅から地下鉄に乗り、吉野町駅で降りた。ここからはバスで行くのが便利だが、例によって私は歩いた。掘割川に沿った道路には信号が多く、たびたび立ち止まらなければならなかったこ

とで、歩きづらいと感じた（バスに乗らなかったことを後悔する）。しばらくして滝頭地区に着いた。

横浜市電保存館は、横浜市営バス営業所の敷地の一角に、細長いビルの一階部分を占有している（2階以上は市営住宅）。この一帯は以前、市電の車両工場だったという。

入口のアーチをくぐり、保存館の建屋へ行く通路わき、左側に一本の鉄柱が立っている。市電の架線を支えるため支柱だったという。直径20センチほど、高さが5メートルほどの鉄管だ。その根元付近に直径5センチほどの穴が開いている。焼夷弾が当たった跡という説明がないと、見落としてしまうかもしれない。

1945年（昭和20）5月29日、この市電用架線ポールに直撃したものと言われている。でも、直撃した瞬間を見た人はいなかったらしい。あるいは、いたとしても、まもなく焼け死んだことだろう。

専門家ではないが、私が見たところでも、それがあ

る角度で空から落ちてと考えれば、こうなるだろう。なお、厳密に言えば、焼夷弾が直撃したのはこの地ではない。これはもともと、横浜市電生麦線なまむぎの、国道15号線の歩道上にあった。このポールは、2007年に道路整備にともない撤去され、その後この市電保存

館に移されたという。



市電の架線用ポールに空襲の痕跡  
鉄管の根元近くの穴が、焼夷弾が直撃した跡とされる

補足すると、当時落とされた焼夷弾はM69タイプのもので、空中にばらまかれる単体では、六角形の筒状で約2キロの重さがある。

焼夷弾とは、クラスター爆弾の一種で、親爆弾の中に、多くの筒型の子爆弾が組み込まれる。筒は六角形

で、ハチの巢のように親爆弾に隙間なく組み込まれる。落下に伴い、ばらばらに落ちてくる。中に油脂が詰められており、地上でその油に火が付き、炎上する仕掛けだ。今では悪名高いクラスター爆弾の一種だ。ベトナム戦争で盛んに使われたナパーム弾と同じ原理だ。ナパーム弾でやけどを負い、逃げ惑うベトナム少女の写真が世界的によく知られている。

その日の空襲は、3月10日の東京大空襲に匹敵する大規模なものだった。約500機のB29爆撃機により約2500トンの焼夷弾が落とされた。空襲は夜間が多いのだが、このときは白昼堂々と、午前9時20分から10時30まで爆撃が続いたと記録されている。アメリカ軍は上空から眺めながら、住民たちが逃げる先（風向きなどでわかるのだろう）を予測し、タイミングを合わせて一網打尽に市街や市民を焼き払ったとされる。

多数のP51戦闘機（大戦中の傑作戦闘機として評価が高いし、飛行士たちはよく訓練されていた）に護衛されていたから、日本軍のやわな戦闘機などは、手も足も出せなかつたとみえる。

燃え盛る炎は、ほとんど消し止めることはできず、火災はその一日中続いたと思われる。横浜市街の大半

が被災した。死傷者多数、家を失った者大多数。数え切れず。

軍からの通達（空襲があれば、成年男子は逃げるな、火を消せ）に従い、火を消そうとした住民たちの多くが逃げ遅れて死んだという話を伝え聞く。軍部は住民を守ろうとせよ、住民の危険を顧みない通達を出していた。

私はそのポールを見ただけで帰ってよかったのだが、保存館の開館時間（10時）になっていたので、中を見学することにした。受付で入場料（200円）を取られたが、市電の実物がズラリと並び、奥に進むと、当時の歴史的な説明のコーナー、精巧な鉄道模型の展示、模型が走り回る鉄道ジオラマなどがあるのだから、意外と充実している。休憩スペースも広い。観客は私一人だけだったから、ゆつたりと見て回れた。見張っているような人もいない。（代わりに監視カメラが不審者を見張っているはず）ただし、私が帰るときには、園児たちの団体が入り口に並んでいた。今の園児たちには、横浜市内を市電が走り回っていたことを想像できるだろうか。

## 便利で豊かな暮らしをするために

### 1. 便利で豊かな暮らし

「世界はほしいモノにあふれている」

これはNHKテレビ番組のタイトルであり、世の中の一面をうまく表現している。豊かな世の中になっている。魅力的なモノが多くあるといっている。ほしいものがあれば、すぐにでも取り寄せられそうだ。

でも、人々が豊かな暮らしをするためには、資金・労力が必要になる……元手を得るには基本的に働かなければならない。便利で豊かな暮らしが快適であることには、疑問を挟みたい。

現実はずいぶんのものであり、働かないで豊かな生活が送れると思うなら、それは幻想であり、幻滅になる。豊かな生活の代償が、けっこうな負担になりつつある。

「働かざるもの、食うべからず」という格言が頭に浮かんでしまう。ただし「働く」の言葉には、金を稼ぐことだけでなく「生きていく」ことでもあるから、基本的に、金を稼がない人を見下したり、不要扱いしたりしてはいけない。「人、稼ぎが多いゆえに、貴からず」という即席の格言を示しておきたい。

現代では現実的に、生きていくためには金が必要であることは確かである。生活のために、われわれは多くの支出をしている。その金をどうやって得るか。

物にあふれた豊かな文明が、人々をせわしなく、あくせく働かせ、余裕のない生活をさせている。ものを奪い合う争奪戦に駆り出されている。思いつくまま、挙げてみると、

住宅、家具（机、椅子、ソファ・ベッド、タンス）  
照明器具、冷暖房器具（設備）、空気清浄器  
食糧、飲料、冷蔵庫、洗濯機

テレビ・ラジオ、パソコン、電話・通信機器、  
時計、眼鏡、服飾、雨具

新聞・書籍、車、自転車……

近年、紙の文化（紙幣を含む）から、デジタルの情報通信へ目覚ましく発達している。現代生活においては、金のかかるものが、きりがなく並ぶ。これらは壊れるものであり、自分では直せないから、修繕するにも金がかかる。

さらに、形ある物以外にも、金を支払っている。情報や教育、サービス関係、趣味的なものへの支払いがある。せわしない現代人のために、交通機関はスピードを上げているが、高価な乗り物になっている。それ

がわずかな時間差であっても、便利なものは高い、という一般式が成り立つ。

公共的なものでも、無料だったものが有料になりつつある。決済のために銀行などに支払う料金もある。

電気、ガス、通信費、回線使用料

上下水道料、ごみ処理費

交通費、旅行、映画、観劇、テーマパーク、

医療、美容・理容

会費、交際費、冠婚葬祭費

各種保険、税金、年金積立、貯蓄……

自己啓発的学習・資格取得にも金を使う。学校を出た後も、働く者たちの多くが、スキルアップが強く求められている。

子供を育てるために、乳幼児期から学生までの時代に合わせてそれぞれ用品が要る。

自分の趣味・嗜好、体力や健康維持のための運動、気晴らしの遊びに金を多く使いがちだから、収入がいくらあっても足りない。個人によって支払うものが異なるにしても、だれでもトータルすればかなりの高額になることに注目したい。慈善事業や宗教に献金・寄付するような余裕などないのが一般的な実情だろう。

一度手に入れたそれらのものが失われたり壊れ

たりすると、不自由なことが実感される。その利便性に味をしめているから、必需品として手放せなくなっている。文明の発達とともに、「人間らしい生活」をするためのコストがますます高くなっている。高級品から安物まで多種多様なものが出回っているから、選択可能だが、文明の発達とともに、生活様式が高級になった。高級志向になっている。一般の生活の中にも、相当高価なものがいくつもある。でも、分割払いで入手が可能になる。実質的な借金だろう。（詐欺的な商法は、分割払いを勧めてくる）どこかの政府のように（金が必要なら借りればいい）というのは、安易すぎる。分割払いにするのは、終の棲家すまがとしての住居に限定すべきだろう。

そのコストに見合う分だけ、人は収入がなければならぬ。その収入を得るためには働かなくてはならない。高級な生活様式についていけないなら、山奥で自給自足のような生活をするか、都会の公園で、ブルーシートのテント生活をするしかない。

だれもが安楽に生きられるわけではない。

周りの多くの人が楽しそうな生活しているのに、自分だけ低賃金でこき使われてはたまらない。高収入でないと、やってられない。高収入の職に就けば

いのだが、誰もが高収入を得られるものでもない。働きすぎでは、心身が持たない。おもしろい仕事なら、一時的にがんばれるにしても、楽しいような仕事はめったにない。ほとんどの職場では、一つのミスも許さず、多くの制約・規則がある中で、課題をこなすためにもがく。くたくたになって、やっと豊かな生活が送れる身分になれるのかもしれない。頑張って働くことは、ストレスフルであり、厳しい。

人々は「安いものから高いものを作り上げて」つまり付加価値を付けることが「働くことの基本」だ。労働者は自分の安い労働力を企業に提供することで、価値あるものを作り上げる。労働者はその企業から対価を得る。価値あるものを作り上げられないなら、つまり製品が市場で売れないなら、破綻し、企業は倒産する。働く人は職を失う。すべては、価値あるものを作れるかどうかにかかっている。作れないなら、もちろん、豊かな生活はできない。

文明が発達し、便利で豊かになってはいるけれども、厳しいという現実がある。

## 2. 強欲人類

われわれ人類は、ホモサピエンスと分類される。ホモサピエンスの特徴は「欲望」が強いことだと、最近

(2023年3月)放送されたNHKテレビ番組「ヒューマニエンスQ」で説明されていた。欲望が強いから、利便性のために知恵を出してきた。

食べ物を得るために、狩猟技術や農耕栽培を発達させた。地球上の各地の環境に適応するように工夫してきた。集団で行動するために、統率のとれた体制の仕組みを発達させた。組織的な強欲ぶりを発揮することが、われわれ人類の特徴だろう。チームワークがよいことで、集団的な力を出す。

権力志向の者が指導者になり、独裁的な支配体制を敷く。その権力に依存したい人々が、強い指導者を持ち上げて協力する。

欲望が弱かったとされる他の人類は、ホモサピエンスに圧迫されて、結局滅びてしまったわけだ。ホモハピルス、ホモエレクトス、ホモネアンデルタールンシス(ネアンデルタール人)……。生存戦略として、欲望が強いことは、必ずしも欠点ではない。

それがヒトの適応能力の高さの要因の一つでもあり、生息域を広げてきた。地球上のほとんどすべてのところに住んでいる。

それはいいとして、ヒトは狡猾であり、人をだます手口や、他人を陥れる謀略にも長けているから、油断

がならない。自分さえよければいい、と心の中で思っている。利己的な生物でもある。自分の暮らしが豊かになることが一番なのだ。金があれば、際限なく豪華な、上級な生活をしたがる。豊かな生活を目指す。常に便利なものに向かう嗜好性がある。

金に余裕があれば、すぐに豪邸を建てたり、高級な家具を買いそろえたりする。高級な車を買入れ、あるいは性能の良いスポーツカーに乗って運転することが大好きだ。そして、大型ヨットに乗って海洋を航行するのもいいし、海外に行ってみたくなる。旅行好きなのでもある。

### 3. 経済的制約

そして社会の経済は、それらの受け払いが回転することで成り立っている。世界経済は、「地球が破綻するまで」加速して走っているところがある。立ち止まっただけでは、「経済は停滞している」のだそうだ。人々はデフレだと言い出す。「デフレ脱却のために、インフレを起こして加速しろ」と多くの経済学者が口をそろえて叫ぶ。どんどんモノが売れ、流通し、消費されることで経済が活況を帯びる。儲かる人が増えてくる。逆に、人々が慎ましい倹約生活をすれば、経済が回らなくなってしまう。

それは人々に対して「もっと消費しろ。もっと稼げ」と言っているようなものだろう。限られた資源なのに、もっともっと地球から搾り取れ！ ごみが出たら、ポイポイ捨ててしまえ！（あとは野となれ山となれ）  
経済的な理由で、人々は都市に集中して住むようになり、過密になることも特徴的だ。

経済の活況は、大量に消費することだ。消費が低迷すると、不景気になってしまう。人々がせつせと買物しなければ、経済が持たない（経済が低迷してしまう）。豊かな生活を求める心が、経済を回す原動力になっているのだが、先立つものがなければならぬ。政府が景気刺激策などと言って支出を増やすのは、応急的な対策だろう。

政治的に、経済政策が重要な柱になっている。公共工事・地方振興策などに、かなりなお金を使い続けている。経済にブレーキをかけるような政策はとれない。失業者が多く出てしまい、政府に批判が集まる。アクセルを踏みっぱなしだ。政府財政破産への道を突き進む。

日銀とタッグを組んでやっている一つは、インフレ政策だろう。日本銀行がインフレ2%目標を掲げて、際限のない金融緩和をしているのも、人々がお金を貯



蓄しないで、使ってしまうことを期待しているからだ。お金を貯めておいたら、インフレで年々お金の価値が下がっていくから、貯蓄は損になる。今のうちに使いなさいと、ささやく。消費者を焦らせて、お金を使わせようとする魂胆である。インフレは、政府が抱えている国債などの莫大な借金を実質的に目減りさせる効果もある。

製造業の企業にしても、人々が製品を買ってくれないと、持たない。売れるものとして新製品をドンドン出し続け、過大広告をして関心をさらに引こうとする。企業は常に消費者の金を使わせるために、やつきとまって魅了する製品を作り出そうとしている。製品開発に怠りない。人々の購買意欲をかきたてたい。人々は流行を追いかけるところがある。新製品に注目する。製造する企業は新製品を次々に出していかなければ、人々に飽きられる。

そんな企業努力を怠れば、他社に出し抜かれる。市場における競争原理の厳しさがある。当然ながら、一定の利益が必要だ。採算が取れない企業や自営業はやっていけない。(昨今、街を歩くと、小売店の衰退が目立つ。売れていないからだろう。) 商品の値段を上げれば利益を増せるが、ライバル社が足並みをそろ

えてくれないと、それもできない。

売る側にしても、売れない商品は廃棄処分する。売れないような生産品は市場に出さない。特に服飾業界では、もつたないことをしている現状が伝えられている。業者としては、売れ残りを安値で叩き売ってしまつては高級ブランドのイメージを崩すから、安値で売らず廃棄処分するのだ。高級ブランドで売ること、利益を確保している商法だから、安物のイメージを持たせたくない。ある一定期間内に売れなかったものは、流行遅れ扱いにしてしまう。廃棄処分の量が多すぎると、当局ににらまれるので、わざわざブランド名のラベルをはぎ取って、一部を市場に出しているとささやかれている。服飾に賞味期限があるわけではないのだが……。

#### 4. 少子化考

世界的に人々の数を減らしている。先進国といわれる国ほど、少子化傾向が強い。出生率2.0を下回れば、人口が着実に減ると考えなければならぬ。国あるいは地域の統計で、将来の人口が予測できる。

近代になって、地球上で人口が爆発的に増えたことで、国際間で食料不足や資源不足のふあんがあり、そ

れらを巡る競争・抗争・戦闘の恐れが広がってきている。それが市民生活に影響し始めている。

生物の繁栄とは、種としての個体を増やすことだろう。そのため努力を営々として行ってきた。どの生物にも課せられた責務のようなものだろう。

絶滅危惧種などは、その都力を怠っているのかもしれない。というより、それらの種にとって生活環境が悪化したことで数を減らしているわけだろう。

ヒトの場合、人自身がその環境を悪化させたという自業自得のようなどころがある。

ヒトは、文明を高度に発達させ、豊かな暮らしをするようになったのに、人口を減らしているのだから、不思議だ。生む数を少なくしている。自ら「多く生まない」選択をしている。これは、子孫繁栄を目指す生物の原則から外れていることだろう。以下、小項目として記述する。

#### ・飽和状態

飽和状態になっており、これ以上人口を増やせなくなったのかもしれない。

#### ・居住の狭さ

生きてゆくためには、ある程度の「縄張り」を確保しなければいけないが、今や十分な土地はなく、多く

の人が集合住宅に押し込められている。居住環境が良くない。川や海で魚介類を狩猟採取することにも制限がついているし、野菜や果実、穀物を栽培するにも、土地の権利を得なければならぬ。地球上で、ただのような地は、不毛の砂漠、あるいは高地・極地しか残っていない。

そして、身の回りに揃えておきたい高価なガラクタを購入することにやつきとなり、自分の子孫を残すという生産的活動を忘れる、あるいは二の次にする。

そのために、人々は自分ひとりが生きるのに精いっぱい、子育てする余裕すら失ってしまったている。

身に余る高価なものを手に入れたがために、ヒトの生活が貧しくなり、生物として基本的な行動である「子育て」ができなくなっている。

#### ・家庭の経済的問題か

少子化の主因は、一般に経済的問題（家計）と考えられているのだが、韓国の例などでは、政府がいくらか経済的に支援をしても効果が上がらなかったという事実がある。

夫婦ともに働きに出ることで、経済的には問題なくても、家庭で子育てする余裕を失っているようにみえる。子どもを生んでまもなく、保育園預ける母が多く

なっている。教育はもう学校任せだ。幼稚園から大学まで、学校に行かせる。給食があるから、もう弁当も作らない。それでも、子供を育てることは手がかかるもので、その労力とコストが大きい。子が一人立ちするまでに、時間と金がかかることになっている。

少子化は、戦後のベビーブームの反動かもしれない。子育ての大変さが、共通認識化してしまったのかもしれない。

近年の少子化は、多く生んでしまうと、豊かな暮らしができない、と考えるからかもしれないし、子育てをしたくないという、意欲の問題かもしれない。

#### ・地縁・血縁の希薄

人々に経済的余裕がなくなったことを象徴するのが、冠婚葬祭を地味化していることだろう。特に、結婚式や葬式に、人々ではできるだけ金をかけないように簡素する方法を選んでいく。結婚の数も減り、簡素にするから結婚式場が儲からずつづれることや、葬式や法事が少ないから寺院が寂れるという現象が起きていく。人々は親族を意識せず、簡素な付き合いをする傾向がある。

冠婚葬祭は、社会的に意味のあることだったが、個人にとっては負担になっている。その機会に人が集ま

ること、たのしみな行事として、文化的な伝統行事として、仲間づくりのための機会として、その意義は大きかった。最近では、その意味が見いだせなくなり、かなり軽んじられている。人が集まることに時間や金がかかるためだ。結婚や葬式は、個人的なことだろう、と割り切られている。そんなことを社会にアピールする必要もないと考えるようになっていく。伝統を守りたい保守的な人にとって、そんな風潮はさびしいことだろう。

祭りなどは、儲かっている企業がスポンサーにつかないと、開催できなくなっている。地域の小さな祭りから、オリンピックのような国際的な大会まで、ボランティアで賛同し、ただ働きで協力する人もいるのだが、ほとんどスポンサーがついているものだ。企業が宣伝のためにスポンサーとなって、下支えしている。

これが高度に発達した豊かな（裕福な）文明社会だろうかと疑問に思う。

（便利で豊かすぎる暮らしをしているために、人々は生殖を二の次にせざるを得なくなつて、少子化に向かっている）と結論付けよう。

他人が負けようが勝とうがオレの知ったことか

## 0. スポーツ報道

各局の報道番組には、たいていスポーツコーナーがあり、ニュースの一環として主な競技の勝ち負けの結果を報道している。ニュースとして、それを取り上げる意味（重要性・緊急性）があるのだろうか、ふと疑問に思う。そして自分が特定の選手やチームの勝ち負けを気にし、関心をもつことに、不思議に思う。ときには、心があまりにもひかれることにわずらわしさを覚えることがある。放送によるスポーツニュースや、新聞のスポーツ欄に関心が行きがちだが、他人の競技でその成績（勝ち負け）に一喜一憂する自分自身が不思議である。

日本チームが活躍したスポーツとして、昨今思い出されるのは、2022年11〜12月にカタールで開催されたサッカーW杯では、盛り上がった。そして、2023年3月、日本とアメリカ（決勝・準決勝のみ）で開催されたワールドクラシックベースボールで、日本国籍のベスト選手を寄せ集めた侍ジャパン・チームが優勝した。何試合かで、きわどい勝ち方をしてきた

が、勝ちも勝ちなだから、うれしい。あいつは日本人か、と思われる人がいたとしても、チームが勝てばいいのだ。ともに監督の株がぐんと上がった。選手たちよりも監督の功績をたたえていた。

今、もっとも話題になっているのは、大谷翔平だろう。アメリカ大リーグのマイナーズという弱小チームに所属しているながら、投打の二刀流（二本のバットで打つことではない）で、大リーグでもトップクラスの成績を上げている。日本人選手が大リーグで活躍していることに、日本中が沸いている。

また、NAB（全米バスケットボール協会）ロサンゼルス・レイカーズでプレーしている八村塁も注目株だ。その年俸の高さには驚かされる。それが一流選手の証明だろう。

そんなスター選手に国内の日本人たちがやたらと熱中してもはやしている。それもスポーツの楽しみ方の一つであるのだが、他国での活躍は、遠い空の下の、一種の幻想のようでもある。

## 2. スポーツ観戦の仕方

勝ち負けにこだわらないと、観戦がおもしろくない。選手たちがいくら素晴らしいプレーをしたとしても、拍手する気にもなれない。他人のスポーツ競技を楽し

む方法は、勝たせたい側に思い入れを持って応援することだ。一方に思いを寄せる。

人々は自分や自分が属する団体の勝ち負けだけでなく、他人や他の団体の勝敗を競うゲームを観戦するだけで、熱中できる。自分のひいきする人や団体が、勝てば自分のことのようにうれししいし、負ければ悔しい。第三者的にみれば、あきれてしまう行動をするような熱烈ファンもいる。

#### ・サッカーの観戦

サッカーの応援席は二つに分かれており、一方の側の応援席で、オレはこのチームのサポーターなのだ」という顔をして騒ぐことが、けっこうおもしろいのだ。

サッカーでは、なかなか点が入らないので、イライラさせられる。手が使えないという制約があるから、もどかしい。ボールが手に当たっただけで、厳罰に処される。蹴ったボールは、なかなか思う方向には飛んで行かない。味方の選手にボールをパスしたつもりでも、敵にカットされることは、よくあることで、悔しがる必要もない。また、オフサイドという変に厳しいルールがあり、最前線にいる味方にパスできないことになっている。点が入りにくくするためのルールだ。ゴールを難しくすることで、選手に高度な技を求めて

いる。というより、一発のゴールで試合が決まること、ハラハラドキドキ感を盛り上げる効果になっている。一点でも点が入れば、勝利につながる。点が入るシーンなど、2時間近くかかる一試合で、数度しかない。ゴールシーンを見ただけを期待して観客席にしているのでは、退屈でたまらないことだろう。選手がシュートしても、ゴールがなかなか決まらない、もどかしさがある。決まれば、大騒ぎする。

ゴール近辺にボールが出れば、たまたまゴールに入ることからも、勝利には運の要素がある。そんな、はずみで点が入ってしまうことが、観客たちを興奮させる一つの要素になっている。

試合後、イライラ感が募った観客たちは、負けて悔しいために、暴徒化することがよくある。負けたチームの選手たちはそそくさとバスに乗り込まなくてはならない。もたもたしている、味方のサポーターに殴られてしまう危険がある。チームを率いる監督は、試合に勝てばほめたたえられ、負ければぼろくそに言われるのが常になっている。

#### ・格闘技の場合

特に格闘技の試合では、自分がそれに参戦するのは大変だ。相手の力を上まわる実力を自分が身に着けて

いなければ、試合に出ることも難しいし、相手に力技で圧倒されることは、とにかく痛い。相撲や柔道では投げ飛ばされてしまうし、空手やボクシングでは、殴られてしまうだろう。負傷してしまう危険がある。格闘技の場合、自分は高みの見物をするのが一番なのだ。

格闘する当人たちは、負ければ痛いのだが、それなりの報酬が得られたり、経済的な支援があったりすれば、選手として続けられるのだろう。スポーツの楽しみとして、優勝やチャンピオンという榮譽もモチベーションだろう。

観客は、どちらかの選手を単にひいきするだけでなく、選手が自分の代理としてリングに立っている、と想像しよう。あたかも自分が戦っていると想像すれば、勝利したときの喜びを共感できる。負けても、くやしただけで、痛くないことが一番いい。勝ったときは、自分が勝ったかのように、負けたときは、じぶんが負けたわけではない、と割り切れれば一番いい。

古代ローマでは、大勢の見物客が詰めかけた闘技場の武器で戦うのだから、戦う側はたいへんだが、見る側は基本的に楽しいので、人気があつたわけだ。勝負

に勝っても、止めを刺すことはしなかったらしいから、敗者に対して配慮があつたようだ。

#### ・野球の場合

私が幼かった頃、父はプロ・アマにかかわらず野球の試合を見るのが好きだったが、それに付き合っただけで見えていた私は、退屈でしょうがなかったことが思い出される。動きがあるのは、打者がボールを打って走り出した瞬間だが、打者はなかなかボールを打たないし、投手はボールを打たれまいとして、なかなかストライクゾーンにボールを投げない。だからとした場面が続く。いつ果てるともなく、攻守が入れ替わる。

最近、たまに中継放送されるテレビでは、それを埋め合わせするように、アナウンサーと解説者がほとんど余計なおしやべりをし続ける。球場の隣席で、知ったかぶりのおじさんどもがわいわい話している状況と同じだろう。テレビの音をミュートにすれば、球場で観戦する実情に近いだろう。他の競技でも、中継番組には似たようなところがある。どっちが勝つてもいいような解説はいらない、と思うのだ。我々は、勝負に関心があるから、そんなおしやべりは聞き流す。彼らは、どちらのチームにも偏らない中立的な見解を心掛けているのかもしれない。でも、試合を観るには、ど

ちらかに肩入れするほうがおもしろいのだ。

野球なども、ボールがどこに飛ぶかわからないところがあり、9人で守っているのだが、するどく飛んでくるボールをうまく取れなかったりする。ファインプレーとエラー（失策）は紙一重なところがある。失投や失策するのも、多分にランダムな、気まぐれの偶然性（ばらつき要素）がある。つまり確率的な要素があるものだから、意外性がある。点差が開いて、ようやく勝敗の行方が見えてくる。1点や2点の得点差ではいつひっくり返されるかわからない。ハラハラドキドキの展開があることが、面白さの要因の一つになっている。

#### ・相撲

相撲にも、意外な結果になったりする。ランクが上のものが下の者に対して常に勝つとは限らない。横綱といえども、下の者に負ける番狂わせを、たびたび演じるものだ。横綱が負けると、観客たちは座布団を投げることになっている。狂喜乱舞の光景の一つかもしれない。憎たらしいほど強い横綱よりも、ほどほどに負ける横綱がいい。立ち合いで体がぶつかると、瞬間的に体勢がよくなったり悪くなったりする。あとは技と力の勝負で、見ている側も体に入った

りする。

#### 3. スポーツの勝ち負けにこだわる

一般にスポーツは、実力と勝負の結果は一致しない。試合をしてみなければわからないところがある。最終盤に逆転というゲームもある。

ここで、質義応答。

Q1. 自分がスポーツすることの意義とは？

スポーツとは、修行の一つであり、主に体力的な向上を目指す。練習すれば、するほどうまくなり、上達するからたのしい。ある程度、上達すれば、やめてもいいのだろう。プロの人でさえ、いつかは引退している。彼らは、技能や体力が落ちて、やめざるを得なくなったわけで、アマチュアは、それらがいくら落ちて、やめなくてもいいことはもちろんである。プロの引退会見で、時々見られる悲壮な決断はアマチュアにはない。やめたいからやめるという気楽さがある。

自分が参加する競技に、個人競技であれ団体競技であれ、夢中になる人は多い。練習すれば、うまくなり、強くもなれるから、張り合いがある。好き好んで練習しているように見えるだろうけど。うまくなるためなら、きつい練習にも耐えられる。自分の努力におおよそ反映する結果が得られるだろう、「やってよかった」



と思える瞬間かもしれない。ことだろう。

Q2. スポーツ観戦のおもしろさの理由とは？

そこに勝ち負けがあるからだろう。

他人の勝ち負けにも関心を持つのは、一般に人の徳性かもしれない。勝ち負けを争う（あるいは競う）ことに情熱を注ぐ。自分で勝負をするだけでなく、他人が勝負している姿を見るのも大好きだ。

スタートラインに立った選手たちを見て、だれが（どちらが）勝つか予想し、その予想が的中するかどうかの楽しみがある。

ただし、それは小さな楽しみ方であって、他人の勝負をもっと楽しむためには、他人に共感することだろう。他人のことを自分のことのように思う。他人をひいきすることだ。目当ての人が勝てば、自分のことのようにうれししいし、負ければ、くやしさが残り、意気消沈してしまう。そのコツは自然と身に着けているものだろう。ときには、他人の勝ち負けが気になるから、厄介だ。だから、「他人が負けようが勝とうがオレの知ったことか」と、そんな思念を突き放さなくてはならない。

とはいっても、他人の試合を面白く見るためには、他人のどちらかに思い入れたほうがよい。競技者のい

ずれかにシンパシー（共感）や感じる時や思い入れるときだ。つまり「ひいきする感情」を持つときだ。感情移入できる人物が対象になる。なぜひいきするか。自分にとつて彼が「ヒーロー」あるいは彼女が「ヒロイン」であることだ。どちらが勝ってもいいような試合なら、おもしろくもなんともない。特に、勝敗が決するまでに、時間がかかるスポーツなどは、見ていて退屈になってしまう。

その感情は、理性を超越するところがある。つまり、これは人に先天的に備わった能力からきている。

・民族・郷土愛

人が自分の属している側を愛することは、当たり前のことだろう。どうしても、その方をひいき目に見てしまう、よしみを感じてしまう。出身地が同じ、同国人というだけで、同胞愛が芽生えてしまう。他国の地で活躍する人を見て、郷土の誇りなどと言って祭り上げる。同族・同胞の意識は根強い。

世界的大会のオリンピックや世界大会は、国別対抗戦の形だから盛り上がる、つまりそのメダルの数で上下がはっきり決まる。集団だから、その出身地が対抗意識を燃やして注目し、観客を動員する。テレビなどの視聴率もぐんと上がる。

## ・想像力

人には、活躍する他人に感情移入し、あたかも自分が活躍していると錯覚する。これは、ヒトが自分のことのように考える想像力を持つているからだ。この錯覚は、思いやりや同情にもつながる。感情移入であり、同化することでもある。

物語という仮想の世界であっても、ストーリーの主人公になりきって、自分がその場に立ち会っているような錯覚を起こす。小説や映画や漫画のストーリーを追っていくことは、そんな感情移入があるから、楽しめる。長編では、次々に苦難や、強大な敵が現れて、行く手をさえぎることになっている。主人公と自分は同体だから、あたかも自分が経験する世界になる。

## ・勝ち負けこだわる性癖

ヒトは勝負することが大好きだ。そして勝てばうれしい。負ければくやしい。勝ち負けにこだわりの、「勝った、負けた」で騒ぐのがヒトだ。それが向上心につながっている。勝つことで優位に立てる。

賭け事の勝負においては、多幸感だけでなく、実質的な利益につながるから、なおうれしい。賭け事の依存症になってしまうのは無理ないのだ。

上下にこだわるのも、同様だろう。とにかく、自分

が他人より上を行きたい。他人を打ち負かしたい欲望がある。スポーツにおいても、学業においても、社会的にも、上を行きたい。なんとかしてライバルを蹴落としたい。議論においても、たとえ自分が間違っている、屁理屈をこねても、あるいは大声を出して威圧しても、相手を言い負かしたい。人の上下関係は、収入にも、プライドにも関係するから、大きい。その上下や役職分担は、だいたい客観的な評価によって決まるが、それぞれの価値観により偏見的な思惑も入りやすい。

試合観戦で、どちらが勝っても、どうでもいい、などと思うと、見ていることはつまらない時間になる。なぜ勝たせたいかは、大した理由がないことが多い。自分の感性で「勝たせたい」と思うときは、自分の理性では決められないし、理解できないものだ。

お目当ての選手が勝てばうれしいが、本来、自分が賞をもらうわけでもなく、自分に利益があるわけでもないから、喜ぶ必要もない。

同国人の活躍は、郷土の誇りのなうれしさがあるだけで、自分に実利はない。だんだん、自分にはない秀でた才能がうらやましくなったりして。

## 4. 負ける悲哀

選手やチームを勝たせたいと思うのは良いとしても、自分との関係がどうかを考えてみると、どこかのチームが決勝進出を決めようが敗退しようが、〈ボクには関係ないこと〉であることがわかってくる。

他人の試合にハラハラドキドキしても、自分に意味がないことに気づく。他人の勝利を見て喜ぶのは、よく考えると、自分にとって何の意味もないことだ。何の利害もない。気の向くまま、一方を応援していることに、無意味さを感じてしまう。スポーツに水を差すことだが、冷静に考えると、他人が勝とうが負けようが、優勝しようが敗退しようが、自分には関係がないことがほとんどだ。でも、思い入れがある。

だれが優勝しようと、特別な賞をもらっても、本来はどうでもよいことなのだ。自分が優勝した気になつては、間違いだらう。自分には関係ないことで一喜一憂する自分に、言い聞かせる必要がある。

国際大会で、選手が負けようと、チームが予選落ちになろうと、どうでもよいことなのだ。

ひいきのチームや選手があつさり負けてしまうのを見るのは、なかなか耐え難いところがある。自分のことのように悲しい。

スポーツには好不調の波があるもので、トップクラ

スと思われていた選手が予選落ちしてしまうことがある。出番が少なくなつた選手を思いやる。実力があつても勝てないという事実には、ファンとしては負け惜しみを言いたくなるのだ。負けたときは、冷たく突き放せばいいのかもしれない。

「他人が負けようが勝とうがオレの知つたことか」  
木枯し紋次郎風に言えば、「あつしにはかかわりのねえことござんす」

## 人は誇りをもって生きる

### 1. 箱根駅伝で監督が選手に声をかけた

「箱根駅伝で監督が、走っている選手に声をかけた言葉「男だろ」は、普通アウトだ」の意見（毎日新聞朝刊 2023/1/31 みんなの広場）に反発して――

選手を励ますための、監督の声かけが男女差別的だというわけだ。でも、「アウト！」という判定には異論を呈したい。監督は、男の矜持を刺激している。

「ここでがんばれないなら、男じゃない」と言いたいのだ。「男なら、やってみろ！」という聞きなれたフレーズある。男としての誇りを持つことは、必ずしも悪いことではない。むしろ、いい結果を生む。

それがアウトというなら、男だからといってがんばる必要はない。という論法になる。性別が否定されてしまうと、「中性」的な人ばかり増えてしまっ、おもしろみがない。男の矜持を失うことは、男であることを否定することだろう。性差がなくなると、男も女もともに、なよなよして、意気地のない人間をイメージしてしまう。

「オレは男だ」と思って、がんばれるのなら、それも

よいだろう。

性差を意識すると、女性差別にもなるのも確かだ。

「男が女より優れている、上位であるべきだ」と考えるのは、幻想だろう。それで競技のタイムが縮まれば、幻想効果というべきものかもしれない。

### 2. 人の誇り

矜持は自尊心でもある。自分を肯定的に考えることでもある。しかしときには、矜持はおごりにもなる。虚栄的、あるいは独善的などところがある。不遜なことで、傲慢のだ。

「万物の霊長」という言葉も、かなり色あせてきている。これも、ヒトは他の動物より優れているという「ヒトの矜持」が表れている。生物学的に、「人間な、優れた動物でも何でもない」ことが、時々、明らかになっている。知恵の共有化に成功し、環境に適應する能力が高くなった、というだけだろう。現実を見ると、学習能力が高いはずなのに、バカなことばかりやっているような生物だから。英知を誇るなど、おこがましい。

それでも、「オレは男だ、万物の霊長であるホモサピエンスだ」という幻想的な思いを抱いて生きていく。

人は誇りをもって生きている。人間の尊厳として、法的にも尊重されている。その誇りが傷つけられたりすると、たいてい怒りだす。でも、怒り狂うほどのものなのかと私はふと疑問を持つ。

例えば、他人から「おまえは、イヌ、サル、ブタだ」などと言われることが大嫌いだ。それを言つては、侮辱になる。人を怒らせてしまう。なぜ侮辱になるのか。人間としての尊厳を保ちたいのだ。見下されたくない。人は「万物の霊長」でありたい。

しかし、人が優れた生き物であると思うのは、うぬぼれだろうし、そんなことで威張れない。威張りたいたいのが本心だろうけど。

人は、人間としての誇りを持っているから、生きられるところがある。「オレは人間だ、畜生ちくしょうどもより上なんだ」

### 3. 人の矜持

誇り、矜持、プライド、自尊心あるいは尊厳としての「心意気」を、人は心の中に持つ。自分を信じること、自信である。自信をもって生きていきたい。自信をなくせば、だいたい何をやってもだめだ。自信を持つているから、新しいことにも挑戦できる。

性別でも、単に男ということで誇りを持つこともあ

る。ジェンダー平等の考えには反することだが、男の誇りも捨てたものではない。男だから頑張れるところがある。多くの男にとつて、力のあるところを見せるのは、得意なところだろう。「力仕事はオレに任せろ」と喜んでやってくれるかもしれない。

社会的地位による誇りもある。位置が上なら、それなりの誇りや自負を持って対処する。「オレがやらなければ、だれがやるんだ」という心意気で、模範を示す。上位者としての自覚である。例えば、上位者なら、みつともない真似はできない、という緊張感を持つ。誇りを持って、自己を律することもある。

「オレは、決してずるいことはいらない、悪人にはなり下がらない」という、モラル意識も芽生えるのも、人としての誇りを持つからだろうし、「闇米やみこめは決して食べない」(戦後の食糧難だった時代の話)あるいは「オレは痩せても枯れても、人の世話にはならん」というやせ我慢も、誇りからきている。その他、負けを認めたくない、だれかには頭を下げたくない、という感情も。そうだろう。誇りを持つことで、つらいケースもあるのだ。

現実には直面し、自分の誇りが幻滅となったとき、みじめである。言い訳が慰めになるかもしれない。ある

いは怒ってみせる、「オレは悪くない。世の中のほうが間違っている！」

自分の弱音やみじめさを口に出さないのが、矜持であるかも知れないが、ときにはぼやきたくなる。それが本音かも知れない。そんなとき、聞き流してやるのが、一番の親切だろう。あなたは他人のぼやきなど聞きたくないにしても。

#### 4・人の上下関係・優劣

ヒトは、上下関係を気にする生き物だ。それはサル  
の時代だったところからのものかも知れない。日本では、  
言葉遣いの使い分けで、尊敬、謙譲の意味を込めたこ  
とがあった。

自分が下に見られはいやなのだし、自分が他人よ  
り上であることで満足する。おだて上げられることが  
うれしい。上下によって役割が異なる。上下があつて、  
組織が機能する。

優劣を気にする。優れた人に対し、尊敬の念も生じ  
るのだが、実はうらやましい。競争社会が背景にある。

「あいつだけには負けたくない」と思うような人物は、  
身近にいるものだろう。足を引っ張ってやりたい。

努力して見返してやることに、嫉妬が原動力となっ  
ているのかもしれない。

尊敬する感情と裏腹なのが、侮蔑であり見下しであ  
り差別である。侮蔑する相手であれば、いくらでも攻  
撃的になれるのが人だろう。でも、それは社会的に通  
常、表に出さず、心に秘めたい。

人の優劣は、厳然としてある。優劣に関しては、平  
等ではない。ただし、劣ったものを切り捨ててしまつ  
たら、社会的に損失になるし、福祉の基本に反してし  
まう。

自分の仲間たちがライバルになることは、常にあり  
うる。同列にいたものが、いつしか、先を言っている  
という現実がある。後れを取るとは悲しい。

学校では、試験の成績で決まる。点数の差が順序に  
なり、学力の差となる。一つの学校を卒業して進学す  
るとき、入学試験で、合格不合格が決まる。学校では、  
常に学力が問われる。

入社試験では学力プラスアルファで決まるから、人  
生で最も悩ましい関門かも知れない。自分を売り込む  
ことに成功したとしても、安住できない。同期で入社  
（あるいは入庁）しても、次に、だれが昇進するかと  
いう人事異動の機会が幾たびかある。仕事ができるか  
できないかが昇進の主な要素だけれど、ほかにもある  
かもしれない。同期で同じ仕事をしてきた者がドンド

ン昇進していくのを見るのは、なかなか耐え難いところがある。そのうち、ため口をきくこともできなくなる。社会では先輩後輩の序列が逆転することも、しょっちゅうあると考えなければならず、覚悟する必要がある。そこで冷静さを失っては、完全に落ちこぼれである。嫌気がさして転職しても、うまくいかないことが多い。

## 5. 人の自由

自分は自由だと考え、他人に束縛されたくないなどと思っても、社会生活は堅ぐるしいところがある。つねに社会の規範に縛られ、自由にならない。社会通念の縛りがある。例えば「表現の自由」といつても、多くの規制や制約があることに気づかされる。自由に生きたければ、孤島で一人暮らしをするしかない。

何事にもルールがあり、ルール違反をすると、罰せられることになる。人々が集団で暮らすための「不由」を定めている。人が集まれば、ルールを作る。明文化するときもあれば、しきたりなど、不文律として守るべき存在がある。ルールや常識を知らないような不作法な人は、仲間に入れない。特に、自己主張が強い人は要注意だろう。

政府は多くの法律を作り、規制をかける。法律、規

範、規制、戒律、ルール……と言いつ方に違いがあるけれど、同義語だろう。基本的な意味は「人の自由にはさせない」ところにある。「縛り」であり、不自由だけれど、それなりに意味があると思わなくてはならない。窓口の相手が「それがルールです」と言い張ったら、あなたは文句を言わずに引き下がらなくてはならない。「なぜそんなルールがあるんだ、だれが決めたんだ？」などと、相手がたとえ若い女性であっても、どなつてはいけない。公共施設にいと、たまにそんな声が私の耳に聞こえてくる。

例えば、社会は、好き勝手に性交することは禁じている。世間の目が光っている。結婚という家庭の枠の中で配偶者だけに、許される。それ以外は不倫となる。ときに、結婚という規則に縛られずに、自由に恋愛し、自由に付き合いたいと思う人もいるだろう。結婚を私的なものとみなすか、公的なものとするかの見解の相違だろう。遊び気分で不特定の相手と性交するのも、男の理想の生き方の一つだろう。いずれも、双方の同意が前提となる。

結婚については、型にはまった快適さや便利さもあるように、不自由さを感じない人もいるだろう。

とはいっても、自由に生きたいという人の基本的な



生き方も尊重されるべきだという社会的通念として受け入れられつつある。

## 思い込み・成りきり・役わり

### 1. 思い込み

思い込みとは、ネガティブな言葉だ。不正に認知していることだ。しかしながら、思い込みによって、他人の思いに共感 (sympathy) し、他人と自分を同一視することがある。思い込みも悪くはない。あたかも、イメージの世界に飛び込むことができるし、自分が他人の心に移り移ったかのように共感できる。

スポーツや知力で競技する分野で、選手や棋士がプロとして成り立つのは、思い込みによるところが大きい。彼らと自分を同化 (同一化) し、彼らの活躍が自分のこととして思えることで、競技の行く末を見守りたくなる。彼らが勝ち進むことは、「自分」が勝ち進むことのように思えてくるから、応援し、援助をする気持ちになる。競技会場への入場料や観戦料を出すぐらいは、抵抗ない。

### 2. 変身願望

人は、服装によって外観が大きく変わる。「馬子にも衣裳」ということわざがあるように、服装次第で、その人柄や職業、地位までほぼわかる。人はそれなりの服装を着れば、成りきることができる。人は想像力で、服装の人と自分を同一視する。

僧侶、神官、警察官、医師など、それぞれ特有の服装 (制服) をしているから、職業がわかりやすいが、近年、ビジネスマンや政治家は同じような色や形の背広を着たりしているから、見分けが難しい。

パレードで、仮装して大通りを練り歩くことも、楽しいのだろう。男なのに、本格的に女装する人もいる。化粧したり、変身したりすることで、お祭り気分になれる。女装すれば、自分は女なのだ。

スポーツなどでも、それぞれの制服的な服装をして出場する。テニスの服装をすれば、自分は一流 (？) のテニスプレーヤーなのだ。

服装によって「心構え」が違ってくることに、注目したい。たんに変身できるだけでなく、それぞれの演技が容易になる。服装に合わせて、「その気」になっ

てくる。  
なお、私自身、実用的な服を着ることを心掛けているだけで、変身・変装に興味はない。

### 3、演技

演技することは楽しいし、おもしろいことのように、少々興味深い。私は小劇場を覗いて観たりしたことがある。演劇に興味を持って活動する人が多くいる。

舞台上立って、ある人物になりきって演技するのは、基本的に楽しいことのようにだ。せりふをいう、顔の表情をつくる、身振り手振りなどの体を動かす、などで表現する。やりにくさ・難しさはあるけれど、演技しきった時、充実感にあふれている。

「生涯、一役者」というフレーズが思い浮かぶ。職業的な役者に限らず、これは誰にでもあてはめたい。

役になりきるためには、服装や、髪形、化粧など外面的なものから、姿勢、態度、言葉使いの雰囲気的なもの、心情、素養、精神性の内面的なものを表現する必要があるのだが、自分の「真の姿」は、他人に見せる必要はない。真の姿など概して醜いものだろう。常に演技で通してもいい。でも、監督など相手が求めるイメージに合わない、合わせられないときは、厳しいかもしれない。

### 4、成りすまし

物まねが得意な芸人がいる。物まねをすることが、多くの人にとって楽しいという背景があるわけだ。

似顔絵として絵で表現することもなかなか楽しい。

成りすましといえば、特殊詐欺で、金品をせしめる悪徳グループだ。彼らは、もう芸の域に達している。警官・弁護士・銀行員・税務署員などに成りすまして、電話で詐欺を働いている。演技力を悪用している。彼らの舞台の上にひきずりこまれ、結局、お金を振り込む役を演じることになる。

### 5、人は多才

だれでも、役者になれる素質があるというものだ。人の多様性・多用途性は広い。多くのことをこなせる多才性がある。多くの仕事に就く才能を基本的に持っている。

偽装する、なりすます、ふりをするとしようと、悪徳のにおいもするのだが、多様性が広がることでもある。自分の別の一面を見せることでもある。それも芸のうちだろう。

一役しかできないと思いつむのは、自分の可能性を消してしまっている。多芸多才であるほうがおもしろい。

若いうちから、将来の自分の職業を決めてしまっても、自分の可能性を限定してしまふことだ。ただし、自分の適性・能力を見定め、早いうちから、その道に

進むのが有利かもしれない。

若者たちとしては、早く一人立ちしたほうがよいかもしれないし、学歴をつけて高収入が見込める職を目指したほうがいいかもしれない。

若いうちは、選択肢が多くて、悩ましいところだろう。ぜいたくな悩みかもしれない。ともあれ、卒業後は社会に役に立つ人になることが求められる。自らも望むところだろう。

自分は何でもできるという思い込みが、自信につながる。一つのことしかできない人は、「つぶしがきかない」といわれてしまう。

ちなみに、近ごろの高等学校は、具体的な職業訓練をやっていない。普通科ばかりで基礎教育中心だ。若者に選択肢を広げてくれているのかもしれない。

近年、長い教育期間を必要とする職業が増えている。成人になっても、社会人（職業人）にはなれないことが多い。社会に出て、見習い期間がある。

社会的には、高齢化社会であり、若年層の人手不足がある。若者たちを早めに職に就かせ、一人の生涯において長く働かせるほうがよいのかもしれない。

## 6. 社会的役割

少年の時、教室で教師が小学生たちに「責任感を持

て！」と説教したことを覚えている。責任感を持つことは、自分に与えられた役割を果たすことだと理解している。自分の役割が何であるか、意識して行動すべきなのだ。例えば、クラスで学級委員に選ばれたら、学級委員として言動しなければならぬ。ある団体や会社に所属したら、役職に任命されたら、その職責を果たすのが社会人だ。最下級の社員だったとしても、最下級の社員なりの職責がある。

適材適所や好き嫌いがあるにしても、人には多能性があり、融通性を持つから、だいたいどんな仕事をもこなせるはずだ。一時期、若かった私は「ボクはこの会社でどんな仕事でもこなせる」という変な自信を持ったことがあった。（現実には、資格や能力の制約があり、限定される。自分は今、何ができるのだろうか、ふと考えてしまう）

社員や職員の場合、与えられた仕事をこなすことが第一だ。職場に配属されたら、自分の適性うんぬんなど、言ってもらえない。新しい仕事に適応して行くしかない。自分の可能性が広がるチャンスでもある。仕事によっては、世界中を飛び回れる。

社会には、仕事の内容が異なり、それぞれの担当があり、役割分担がある。それは、一人一人がそれぞれ

役者として演技することと同じなのだ。アドリブでセリフを言う機会が多くなるかもしれないが、基本は指定された役回りで、指定された脚本に従って演技することだ。

家庭においても、それぞれの役回りがある。男性は「夫・お父さん」として演じることが求められる。女性には「妻・お母さん」として演じることだ。どう演じればいいのかは、両親がしていたことを思い出せばいい。「あんなオヤジにはなりたくない」と思っているなら、自分流で演じればいい。自分の理想像を心に描きながら、試行錯誤する。

立場や地位によって、指導的役割があり、逆に指導や規範に従って行動する必要もある。人が社会的な生物であることが、基本だ。社会的なルールを破れば、当然罰せられることになる。しかし、個人にとっては、そんな制約は、わずらわしいこと、余計なこと、束縛でもある。

人間は社会的動物であることが基本になっている。社会から逸脱したら、生きづらい。自分の自由に生きようとしても、社会通念が逸脱したら、侮蔑され、差別され、迫害されることにもなる。

例えば、LGBTに対して、以前は社会的に厳しい

目が向けられていた。「なんだ？ あいつ、男の役割を放棄し、女になっている」などと。ほとんど差別的な扱いをされていた。今、社会はかなり寛容になってきている。あなたは、あなたらしい生き方をすればいいでしょう。